

悠久の京を訪ねて Part IV

Vol.15



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

古墳を守る盾持ち人形埴輪

■埋もれていた古墳

一般的に古墳といえば、墳丘に樹木が茂る、小高い丘を形成している風景を連想する方が多いかも知れませんが、亀岡市時塚1号墳(5世紀後半築造)は、墳丘が後世に削り取られていたため、発掘調査で造り出し(方形の突出部)をもつ全長25.4m、幅24mの方墳であることがわかりました。造り出しでは葺石の一部を確認するとともに、中央部に全長4.3m、幅1.5mの埋



盾持ち人形埴輪

葬施設を確認しました。埋葬施設からは轡や、矛や剣、矢じりなどの鉄製武器が数多く出土しました。また、古墳の周溝からは、盾持ち人形埴輪をはじめ人物・甲冑・盾形埴輪が出土しました。

時塚1号墳



■盾持ち人形埴輪の「まなざし」

盾持ち人形埴輪の高さは62cmです。円筒埴輪の正面に盾を作り付け、その上部に板状の人面を彫り込んでいます。頭頂部と耳、眼、口を切り抜いて表現し、眉と鼻は立体的に表現しています。特に、切れ長の鋭い眼は、線刻で表現された「隈取り」ないしは「入れ墨」により強調されています。そのまなざしは、古墳へ侵入しようとするものを睨みつけ、侵入を防ごうとしたのでしょうか。

また、盾持ち人形埴輪とともに甲冑形埴輪や盾形埴輪など武器・武具に類する埴輪が多くみられることも注目されます。やはり古墳に侵入しようとするものを排除しようとしたのでしょうか。このように古墳に樹立された埴輪から埋葬された人を守る古代人の意図を垣間見ることができます。



睨みつけているようなまなざし